

プラトニック・ベイビー あらすじ

寂れた村の薬種商を訪れ、私は精子カプセルを買う。

遡ること一年と少し前、「男」と出会ったのは、派遣先の宴会場だった。初対面の「男」から、「愛の実験をしよう」ともちかけられる。

実験とは、プラトンの「饗宴」にもとづき、相手の幸福を願うだけという、真の愛の検証であった。会うこと、触れ合うことは許されない、それこそが真の愛だと「男」は言い切る。性交とは自分の遺伝子を永遠に残すための行為であり、愛とは別の次元だというのだ。その上、互いをわがものにしようとする恋などは、愚劣で醜悪な脳のエラーであるとも言う。だから、互いの名前、年齢、一切の情報も不要だとする「男」の理論に、戸惑いながらも私は惹かれてゆく。

しかし、会えない月日が続く中、「男」への肉欲を抑えきれなくなった私は、「男」に対して憎しみを抱き、実験を降りる決意を伝える。

すると、「男」はかつて自分が父親を殺したことを語り始める。彼の悲しみを知り、共有したいと私は願う。

そして、理論にもとづき、遺伝子を継承することを決めたのだ。